

第25回 学会報告記

(第26回 日本心血管インターベンション治療学会 ; CVIT 総会 2017)

関西労災病院循環器内科、畑陽介と申します。先日行われました CVIT 総会についてご報告させていただきます。

1 会場

日本心血管インターベンション治療学会 (Japanese Association of Cardiovascular Intervention and Therapeutics: CVIT) が、2017.7.6(木)-8(土)に国立京都国際会館にて開催されました。

本大会からライブデモンストレーションが復活したほか、多くのシンポジウム、ビデオセッションも含めて、メディカル 950 演題、コメディカル 200 演題と過去最大規模の演題数となり、血管内治療への関心の高さをうかがわせる盛況ぶりでした。



京都府の PR キャラクター : まゆまる (推定年齢 2000 歳)

2 発表

当院からはシンポジウム 2 演題、パネルディスカッション 1 演題、Late Breaking Clinical Trial 1 演題、Young Investigator Award (YIA) 1 演題、一般口演 3 演題を発表させていただきました。

シンポジウムでは冠動脈治療に関して辻先生、辻村先生が、パネルディスカッションでは奥野先生が発表され、非常に活発なディスカッションを行っておられました。

また YIA では僭越ながら大動脈解離に対する治療法についての発表で畑が最優秀賞をいただくことができました。ご指導いただいた上級医の先生方に深く感謝申し上げますとともに、これを励みに日々の診療に取り組んでいく所存です。

一般口演では冠動脈治療について辻村先生、末梢血管治療について奥野先生が発表され、内容・質疑応答ともに非常にクオリティの高い発表となりました。

また、当科冠動脈治療部門主任石原先生は Late Breaking Clinical Trial とシンポジウムで演者を務められ、当科副部長飯田先生は末梢血管分野のライブデモンストレーション、パネルディスカッションで座長、ランチョンセミナーでは演者として新しい知見を発表しておられました。

辻 朱紀 先生

シンポジウム（日本語セッション）

「エベロリムス溶出性ステント留置 26 か月後の超遅発性ステント血栓症を光干渉断層撮影、血管内視鏡、近赤外線分光法で観察した一例」



畑 陽介

Young Investigator Award (症例部門)

「A 型大動脈解離に対して Amplatzer Vascular Plug 2 を用いてエントリー閉鎖を行った一例」

※症例部門 最優秀賞受賞

奥野 翔太 先生

パネル ディスカッション (英語セッション)

「血管内視鏡による第一世 SES 留置後超慢性期に認められた黄色プラークの臨床成績に与える影響の検討」

一般演題 (口演・英語)

「大動脈腸骨動脈病変による閉塞性動脈硬化症を有する 80 歳以上の高齢者に対する血管内治療の有効性と安全性に関する検討」



辻村 拓也 先生

シンポジウム (日本語セッション)

「冠動脈のステント留置後に血管内超音波カテーテルがスタックした 2 症例」

一般演題（口演・英語）

「SYNTAX score の予後予測因子としての有用性の検討」

一般演題（口演・日本語）

「本邦における下肢閉塞性動脈硬化症患者の腸骨動脈病変に対する Epic ステンツの留置 2 年後の臨床成績の検討」



石原 隆行 先生

シンポジウム（日本語セッション）

「ステント内再狭窄病変と高度石灰化病変に対するエキシマ レーザー冠動脈形成術の有効性の検討
- ULTRAMAN registry サブ解析」

Late Breaking Clinical Trial

「スコアリングバルーンの冠動脈形成術後の最小内腔面積に与える影響の比較検討：単施設無作為化試験」



飯田 修 先生

シンポジウム（日本語セッション）

「薬剤溶出性バルーンを用いた血管内治療について」

ランチョンセミナー

「Necessary Features and Functions of Stents and DCB in SFA Treatment」

3 まとめ

今回の CVIT 総会は、ライブデモンストレーションを含めて実地臨床に明日からでも生かすことのできる内容が数多く盛り込まれたものとなっていました。演題も非常に多岐にわたっており、日常診療だけでは得ることのできない知識を学び取ることができました。

また、発表形式も英語でのセッションが多く、今後必ず必要となってくる英語で伝え、ディスカッションする力を試す絶好の機会でした。当科ではカンファレンスにて英語でのディスカッションを含めた論文抄読会を行っており、日ごろから英語を使う環境に身を置くことが非常に重要であると再認識することができました。

以上、CVIT 総会報告記でした。

文責：畑